

清代志怪小説の形成について

著者	田中 智幸
雑誌名	鶴見大学紀要. 第1部, 日本語・日本文学編
号	57
ページ	747-781
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000888



清代志怪小説の形成について

田 中 智 幸

はじめに

志怪小説の特徴として、一篇の骨子を成す怪異譚とよく似た話が他書にも見える事がある。しかし、その怪異譚は説話の単なる重複ではなく、従来の説話をもとに、更に新たな物語性が付加された全く別の作品となつて存在している。とりわけ清代の志怪小説にはこの傾向が顕著で、そこには『搜神記』『搜神後記』以来の六朝志怪をはじめとする説話を材料にして、新たな志怪小説を模索し創造しようとする作者の著作態度が伺える。記録文学としての伝承を担うという、志怪小説本来の使命から意図的に逸脱を図る姿勢に対しては、蒲松齡の『聊齋志異』が世に出ると、早くも紀昀によって批判がなされた。

『閱微草堂筆記』『姑妄聽之』に載せられた盛時彦の跋文には「先生、嘗て曰く『聊齋志異』は一時に盛行す。然れども才子の筆にして著書者の筆に非ず。虞初以下、干宝以上、古書多く佚す。其の見る可き完帙は、劉敬叔『異苑』、陶潜『続搜神記』は小説の類なり。『飛燕外伝』『会真記』は伝記の類なり。『太平広記』は事ごとに類を以て聚む。故に併び収む可し。今、一書にして二体を兼ね。未だ解せざる所なり」と記されている。『聊齋志異』は才子の筆に

成る創作であつて、国家が責任をもつて保存すべき著作とは認められないと、明確に區別するのが紀昀の立場であり、前野直彬氏^(注2)は「尋常の怪異談とは違ふ独自の小説的世界を構築しているところに『聊齋志異』の特質がある」と指摘している。卑見によれば、清代の志怪小説におけるこのような潮流は、『聊齋志異』のみならず、『閱微草堂筆記』『子不語』『諧鐸』等にも当てはまると思われる。小論では、この問題を検証すべく、清代を代表するこれらの志怪小説の中から、その典型例と思われる作品を手がかりに、清代志怪小説がどのような資料をもとにして書かれ、如何にして形成されたか、検討してみたい。

一

『諧鐸』の著者、沈起鳳、字は桐威。蕢漁または紅心詞客と号した。喬雨舟の『諧鐸』「校点後記」^(注3)に拠れば、乾隆六年（一七四一）江蘇呉県（今の蘇州）の人。生平の事跡を伝える資料は乏しい。二十八歳で挙人となったが、その後会試に何度挑むも及第せず、安徽省祁門県の県学の教官となった。売文と幕僚となることで生計を立てたが、窮困潦倒の生涯であつた。卒年は不詳であるが、乾隆五十九年（一七九四）に著した『周次岳公八旬寿序』と『馬太君寿序』によれば、乾隆の末年にはまだ在世していたことが分かる。蒋瑞藻の『小説考証』巻七に引く『青灯軒快譚』には「諧鐸一書、聊齋以外、罕有匹者」とある。鲁迅の『中国小説史略』には、『聊齋志異』を手本としたものとして呉門の沈起鳳が書いた『諧鐸』十卷（乾隆五十六年序）を挙げ、「意味内容が滑稽に過ぎて、文章も繊細すぎる」という簡単な記述が見えるのみである。

『諧鐸』が『聊齋志異』を手本として書かれたという鲁迅の指摘は確かで、それは本書を別名『新聊齋』と称した

ように蒲松齡に私淑していた事が伺えるが、さらに沈起鳳は『聊齋志異』以外の書についても参考に成書したと思われる。本項では、この筆者の推測を裏付ける典型的な作品として『諧鐸』の中から卷一「虎痴」を取り上げ、この作品が具体的にどのような資料に基づいて書かれたものであるか、検討を試みる。最初に『諧鐸』卷一「虎痴」と「虎痴」を執筆するに際して参考にしたと考えられる『聊齋志異』卷六「向杲」の全文を掲げる。読み易さに配慮して、資料は適宜段落分けを行っている。

秦川の女子、霍小嫺は殊色有り。父、豪右の某と田界を争ひ、他事を以て諸官に誣しひられ、竟に獄に斃る。母、痛哭して曰く、家に男子無し。誰か父の復仇者と為る者ぞ。恐るらくは白骨冤埋し、終に千秋黒獄と作らんことを、と。女、涕なみだを含みて進みて曰く、児、不肖にして髫齡稚齒、趙家の娥と作る能はず。仇人を得て之を殺す者有れば、児、願はくは箕箒を執りて之に事へん、と。母、其の誠に鑑み、日々其の言を以て諸を西山の麓に侍る。

一日、某、県令の寿を祝いに入城するに、路、西山に出づれば、虎、前に突起し喉を嚙みて斃すを聞く。母、女、方に手を額にして慶ぶ。忽ち一虎、尾を曳きて来たり、徑に堂上に登る。母女、色を變じ却き走る。虎、徘徊瞻眺し、殊に惡意無し。母、扉を闔して語りて曰く、今日、某を道に殺す者は、汝に非ざるか、と。虎、之に頷く。母曰く、君の義に仗り、我が前の仇を雪ぐを蒙る。鶯鶯たる母女、定めて当に香花頂礼し、用て大德に酬ゆべし。未だ識らず、降臨玉趾するは、意、何為せんと欲する、と。虎、目を怒らせて視ること、其の約を爽たがふる者を憎むに似たり。母曰く、汝、我れを食言するおもと以ふか、と。

息壤は彼に在り、本より宜しく敬みて幼女を將つて侍して裳衣を奉ずべし。但だ起居寢食は、彼此れ道殊にす。安くんぞ竟に伉儷を成すを得ん。況んや我が年、桑榆に近く、家に蘭玉無し。方に倚嬖を將て活を為さんとす。

汝、地下人の為に怨みに報ゆるも、独り未亡人の為に徳を施さざるか。謹しんで衷曲を陳ぶ。乞ふ、衿全を賜はらんことを、と。

虎、其の語を聞くや、神凋へ氣喪ひ、頭を垂れ出でんと欲す。而れども、一步に九顧して依依として舍かず。女、慷慨して前みて曰く、君、且く住まれ。妾に一言有り。幸はくは明听を垂れん。妾、前に身を以て相ひ許す、と。豈に敢へて昧心せんや。想ふに、衾綯の共にする、君亦た其の不可なるを知る。如し旧約を忘れざれば、当に一室を掃除し、君と終身相ひ守り、夫婦の名を存するは可なり、と。

虎、首肯すること再三、欣然として嘉納す。女、乃ち虎を導き帷に入れ、菟裘を綉榻の旁に営む。食は則ち牢を同にし、居は則ち室を同にす。女、晨に起き粧を理むれば、虎、必ず身を奄次に潜め、目を側めて偷み窺ふ。夜は女の装を卸し、床に登り、就寝するを俟ち、始めて床下に伏すも、竟夕寐ねず。鼾声を以て其の清夢を擾すを恐るるなり。時に甘旨の給せざる有れば、則ち鹿脯を銜み以て進む。小恙を抱く或れば、焦思噪急し、室内を盤旋すること停趾する無し。病癒ゆれば、始めて歛び躍ること初めの如し。

女、習ひ以て常と為す。而れども、母氏、年邁き依る無きに因り、時に女の失計を咎めて、虎を遇する礼貌も亦た衰えたり。虎、一夕、竟に去る。母、婿を擇ぶを為さんと欲す。女曰く、徳に背けば不祥なり。恩に負けば福に非ず。況んや女子の心を以て人に許すをや。豈に必ずしも形骸の論を作さんや、と。執りて允さず。後、女郁疾を以て死す。屍を堂上に停む。虎、忽ち嗥哭して来たり、泪下ること雨の如し。送殮する者、皆な之を見る。繼いで玉を祖塋の側に埋む。虎、一日に巡視すること三たびす。春秋の令節には輒ち山果を銜へて以て奠る。三載を越ゆること一日の如し。母は貧乏にして自活すること能はず。虎、猶ほ日々、山簞・野兔を取りて其の家に恤れみを存すると云ふ。

向杲、字は初旦、太原の人なり。庶兄の晟と最も敦き友たり。晟、一妓と狎る。名は波斯。割臂の盟有り。其の母の直を取るに奢るを以て、約す所は遂げず。適々其の母、良に従はんと欲し、願ふに先ず波斯を遣らんとす。莊公子といふ者有り。素より波斯に善し。贖ひて妾と為さんと請ふ。波斯、母に謂ひて曰く、既に同に水火を離れんと願ふ。是れ地獄を出でて天堂に登らんと欲するなり。若し妾、之に媵れば、相ひ去ること幾何ぞ。肯へて奴の志に従へば、向生其れ可なり、と。母、之を諾し、意を以て晟に達す。時に晟は偶を喪ひ、未だ婚せず。喜び、貲を竭くし波斯を聘き以て帰す。

莊、聞き、好む所を奪はるるを怒り、途中偶々逢へば、大いに詬罵を加ふ。晟、服せざれば、遂に従人を嚇し、折箠もて之を笞うつ。斃るるに垂んとし、乃ち去る。杲、聞きて奔り視れば、則ち兄は已に死す。哀憤に勝へず。具に郡に赴くに造る。莊、広く賄賂を行ひ、其の理をして伸ぶるを得ざらしむ。杲、忿を隠して中に結ぶも、控訴す可き莫し。惟だ路に莊を刺殺せんことを要めんと思ふのみ。日々利刃を懷き、山径の莽に伏す。久しうして、機漸く洩る。莊、其の謀を知り、出づれば則ち備へを戒しむること甚だ嚴なり。汾州に焦桐なる者有り、勇にして善く射るを聞き、多金を以て聘き衛りと為す。杲、施す可きを計る無し。然れども、猶ほ日々之を伺ふ。

一日、方に伏すに、雨暴かに作り、上下沾濡し、寒さと戦ふこと、頗る苦だし。既にして烈風四塞し、氷雹繼いで至り、身は忽然として痛癢すら復た覚ゆる能はず。嶺上に旧より山神の祠有り。強いて起ち、奔り赴く。既に廟に入れば、則ち識る所の道士内に在り。是に先だち、道士嘗て行きて村中に乞ふ。杲、輒ち之に飯せしむ。道士、故を以て杲を識る。杲の衣服の濡れ湿るを見、乃ち布袍を以て之に授けて曰く、姑く此に易へよ、と。杲、衣を易へ、凍ゆるを忍び、蹲ること大の若くす。自ら視れば則ち毛革頓に生じ、身は化して虎と為る。道士は已

に在る所を失ふ。心中、驚き恨む。転じて念ず。仇人を得て其の肉を食らふは、計るに亦た良得なり、と。山を下り旧処に伏す。己の屍は叢莽の中に臥るるを見、始めて前身の已に死するを悟るも、猶ほ鳥鳶に葬らるるを恐る。時時に邏りて之を守る。

越日、莊、始めて此を経。虎、暴かに出で、馬上に於て莊を撲ち落とし、其の首を齧み之を咽む。焦桐、馬を返して射れば、虎の腹に中つ。蹙然として遂に斃る。杲、錯楚の中に在り。恍として夢より醒むるが若し。又た宵を経て始めて能く行歩し、厭厭として以て帰る。家人、其の連夕返らざるを以て、方に共に駭き疑ふも、之を見て喜び相ひ慰問す。杲は但だ臥し、蹇渋して語る能はず。少間くして莊の信を聞き、争つて牀頭に即き、慶びて之に告ぐ。杲、乃ち自ら言ふ、虎は即ち我なり、と。

『聊齋志異』卷六「向杲」

『諧鐸』卷一「虎痴」は、霍小姨という女性の父親が、豪族の某と田畑の境界線について争いを起こすが、別件で濡れ衣を着せられたまま獄中で無念の死を遂げた。母と娘は父の仇討ちを悲願とし、代わりに無念を晴らしてくれた者には奉公人となって仕える旨を西山の麓に祈った。するとある日、西山を通りかかった某に虎が襲いかかり、某を噛み殺したのだった。

母と娘が額に手を当てて喜び合っているところへ突然虎が現われ、約束を迫るかの風情であった。虎と連れ添わざるを得なくなった霍小姨はしぶしぶ同居を始めた。やがて霍小姨が病で亡くなると、虎は悲しげに咆哮しながら雨のように涙を流し、一日に三度も墓の見回りをした。また、母親が貧乏で生活が立ち行かなくなると、虎は毎日、鹿や野兎を獲つて来たが、それはまるで生活の足にしようにするかのようにであったという。

以上は「虎痴」の簡単なあらすじであるが、前半部の内容は、今示した『聊齋志異』卷六「向杲」とよく似ている。すなわち、兄を撲殺された向杲が、莊公子という無法者を役所に訴え出たが、莊公子は賄賂によって役人を買収

したため控訴できなかった。それでもなお兄の怨みを晴らすべく、毎日、利刃を懷にして山中に身を潜め、莊公子を待ち伏せしていると、道士の術によつてその身は虎となり、遂に宿敵莊公子を噛み殺した。その時、護衛として雇われていた焦桐の放った矢によつて虎は息絶えるが、やがて息を吹き返し、向杲は家に帰ることができた、というのが「向杲」の内容だからである。

ところで『諧鐸』『虎痴』はその主題のごとく、虎が人間の娘に恋をし、娘に代わつて仇討ちをするという、極めて奇異な内容となつてゐることはいま見てきた通りであるが、動物が人間の娘に恋をするという趣旨の話は「虎痴」独自のものではなく、古く『搜神記』巻十四に二箇条見えてゐる。いま、該当箇所のみ次に掲げる。

時に戎呉、強盛にして数々辺境を侵す。將を遣り征討するも擒勝すること能はず。乃ち天下に募り、能く戎呉の將軍の首を得る者は、金千斤に購ひ、邑万户に封じ、又た賜るに少女を以てせん、と。後、盤瓠の頭を銜み得て將に王闕に造らんとす。王、之を診視すれば、即ち是れ戎呉なり。之が為に奈何んせん、と。群臣皆な曰く、盤瓠は是れ畜なり。官秩す可からず。又た妻す可からず。功有りと雖も施す無きなり、と。少女、之を聞き、王に啓して曰く、大王既に我れを以て天下に許す。盤瓠は首を銜みて來り、国の為に害を除く。此れ天命の然らしむるなり。豈に狗の智力ならんや。王者は言を重んじ、伯者は信を重んず。子女の微軀を以て明約を天下に負く可からず。国の禍なり。王、懼れて之に従ふ。

（『搜神記』巻十四）

旧説に、太古の時、大人有りて遠征す。家に余人無く、唯だ一女・牡馬一疋有るのみ。女、親ら之を養ふ。窮居幽処し、其の父を思念し、乃ち馬に戯れて曰く、爾、能く我が為に父を迎へ得て還れば、吾れは將に汝に嫁せん、と。馬、既に此の言を承け、乃ち韁を絶ちて去り、徑に父の所に至る。父、馬を見て驚喜し、因りて取りて之に乗る。馬、自ら來たる所を望み、悲鳴して已まず。父曰く、此の馬、事無くして此くの如し。我が家、故有

ること無きを得んや、と。亟に乗り、以て帰る。畜生の非常の情有りと為し、故に厚く芻養を加ふ。馬、肯へて食らはず。女の出入を見る毎に、輒ち喜怒奮撃す。此の如くすること一に非ず。父、之を怪しみ、密かに以て女に問ふ。女、具に以て父に告ぐ、必ず是の故が為なり、と。父曰く、言ふこと勿れ。家門を辱かしめんことを恐る。且つ、出入すること莫れ、と。是に於て弩を伏し、射て之を殺し、皮を庭に暴す。（『搜神記』卷十四）

右に示した『搜神記』の二箇条の記事を一読すれば、人間に恋をするという『諧鐸』『虎痴』の虎の話は、王（高辛氏）の姫に恋した犬の盤瓠や、大人の娘に恋した馬の話に着想を得たことは明らかであろう。さらに「虎痴」の虎が理不尽な死を遂げた家族の仇討ちをするというのは、既に見た『聊齋志異』卷六「向杲」の話がもとになっていると思われる。

次に「虎痴」の後半部について。霍小嫖は虎との約束を果たすべく、一室で虎と寢食を共にして連れ添うこととなる。虎が霍小嫖を氣遣うさまは、いびき声で安眠を妨げないように一晚中眠らず、ご馳走が必要な時には、すぐに鹿の肉を啜えて来、娘が病気の時には思いつめた様子で部屋の中を歩き回るなど、あたかも下僕のようにであった。やがて娘が病死すると、虎は毎日、残された母親に鹿や野兎の肉を届け、生活の面倒を見たという。これとよく似た話は、『聊齋志異』卷五「趙城虎」の後半部に見えている。煩雑になるが、考察に必要であるから全文を次に掲げる。

趙城の嫗は、年七十余。止だ一子のみあり。一日、山に入り、虎の噬む所と為る。嫗、悲痛して幾んど活くるを欲せず。号啼して宰に訴ふ。宰、笑ひて曰く、虎、何ぞ官法を以て之を制す可けんや、と。嫗、愈々号跳して制止する能はず。宰、之を叱るも亦た畏懼せず。又た其の老ゆるを憐み、威怒を加ふるに忍びず。遂に虎を捉ふるを為すを諾す。嫗は伏して去らず。必ず句牒の出づるを待ち、乃ち肯へて行らん、と。宰、之を奈ともする無し。即ち諸役に問ふ、誰か能く往く者ぞ、と。一隸あり、名は李能。醺酔して坐下に詣る。自ら言ふ、之を能く

す、と。牒を持ち下り、嫗は始めて去る。

隸、醒めて之を悔ゆ。猶ほ謂ふ、宰の局を偽り、姑く以て嫗の擾るるを解かんとするのみ。因りて亦た甚だしくは意を為さざらん、と。牒報を持ち繳さんとす。宰、怒りて曰く、固より之を能くすと言ふ。何ぞ復た悔ゆるを容れん、と。隸、窘しむこと甚だし。牒を請ひ、獵戸を拘せんとす。宰、之に従ふ。隸、諸々の獵人を集め、日夜、山谷に伏す。冀はくは一虎を得て、責を塞ぐ可きを庶ふ。月余、杖を受くことる数百、冤苦控ふる罔し。遂に東郭の嶽廟に詣で、跪きて之に祝す。哭すれども声無し。

何ばくも無くして、一虎、外自り來たる。隸、錯愕して啞噬まるるを恐る。虎、入りて殊に他顧せず。門中に蹲立す。隸、祝して曰く、如し某の子を殺す者は爾なれば、其れ俯して吾が縛を聴け、と。遂に縲索を出し、虎の頸に繋ぐ。虎、耳を帖れて縛を受く。牽きて臬署に達す。宰、虎に問ひて曰く、某の子、爾之を噬むか、と。虎、之に頷く。宰曰く、人を殺す者の死するは、古への定律なり。且つ、嫗は止だ一子あるのみ。而るに爾、之を殺す。彼の殘年、尽くるに垂とす。何を以て生活せん。倘し爾、能く子の若くするを為すか、我將に之を赦さん、と。虎、又た之に頷く。乃ち縛を釈きて去らしむ。

嫗、方に宰の虎を殺して以て子に償はせざるを怨むなり。遲旦、扉を啓けば則ち死鹿有り。嫗、其の肉革を貨り、以て資度に用ゆ。是自り以て常と為す。時に金帛を銜み、庭中に擲ぐ。嫗、此れ由り豊裕に致る。奉養は其の子に過ぎ、心竊かに虎を徳とす。虎、來たり、時に簷下に臥して竟日去らず。人畜相安んじ、各々猜忌無し。數年、嫗死す。虎、來たり堂中に吼ゆ。嫗、素より積む所あり。綽として葬を営む可し。族人共に之を瘞む。墳壘方に成らんとす。虎、驟かに奔り來たる。賓客尽く逃ぐ。虎、直ちに冢の前に赴き、嗥鳴雷動し、時を移し始めて去る。土人、義虎の祠を東郊に立て、今に至りて猶ほ存す。

〔聊齋志異〕卷五「趙城虎」

老婆のひとり息子を山中で噛み殺してしまった虎が、老婆の訴えにより自分に逮捕状が出ている事を知ると、郊外の東にある嶽廟に自首して来た。虎は知事の温情により、息子の代わりになることを条件に死罪を免れた。虎はその後、息子以上に老婆に対して孝養を尽くしたため、老婆と虎は互いに信頼し合い、疑いや恨みの気持ちを持たなかったという。人と虎との穏やかな暮らしぶりは、霍小嫺に誠心誠意愛情を注ぐ「虎痴」の虎を彷彿させる。このように『諧鐸』『虎痴』と『聊齋志異』『趙城虎』には、いずれも人語を会する心優しい虎との和諧のさまが描かれているという点で共通している。注目すべきは、「虎痴」と「趙城虎」にはよく似た記述が多く見い出せることである。次にそれぞれの対応関係を示そう。上段に「虎痴」、下段に「趙城虎」の資料を対比させる。

母、其の誠に鑑み、日々其の言を以て諸を西山の麓に拷る。

今日、某を道に殺す者は、汝に非ざるか、と。

虎、之に頷く。

虎、首肯すること再三、斤然として嘉納す。

虎、其の語を聞くや、神凋へ気喪ひ、頭を垂れ出でんと欲す。

時に甘旨の給せざる有れば、則ち鹿脯を銜み以

東嶽の嶽廟に詣で、跪きて之に祝す。哭すれども声無し。

宰、虎に問ひて曰く、某の子、爾之を噬むか、と。虎、之に頷く。宰曰く、人を殺す者の死するは、古への定律なり。且つ、軀は止だ一子あるのみ。而るに爾、之を殺す。彼の残年、尽くるに垂とす。何を以て生活せん。倘し爾、能く子の若くするを為すか、我將に之を赦さん、と。虎、又た之に頷く。虎、耳を帖れて縛を受く。牽きて県署に達す。

遲旦、扉を啓けば則ち死鹿有り。

て進む。

女郁疾を以て死す。屍を堂上に停む。虎、忽ち
嗥哭して来たり、泪下ること雨の如し。

春秋の令節には輒ち山果を銜へ以て奠る。(中略)

虎、猶ほ日々、山獐・野兔を取りて其の家に恤
れみを存すると云ふ。

〔諧鐸〕「虎痴」

嫗死す。虎、来たり堂中に吼ゆ。

虎、驟かに奔り来たる。賓客尽く逃ぐ。虎、直ちに冢の前に
赴き、嗥鳴雷動し、時を移し始めて去る。

嫗、其の肉革を貨り、以て資度に用ゆ。是自り以て常と為す。
時に金帛を銜み、庭中に擲ぐ。嫗、此れ由り豊裕に致る。

〔聊齋志異〕「趙城虎」

「虎痴」と「趙城虎」の記述中にこれだけ対応する表現が多く、しかもその内容の特異性を考えると、『諧鐸』卷一「虎痴」は、その前半部は『搜神記』卷十四の二箇条の説話と『聊齋志異』卷六「向杲」をもとに、また後半部は『聊齋志異』卷五「趙城虎」をもとにして書かれたと推測される。

さて、ここで『諧鐸』卷一「虎痴」をめぐる一連の考察の対象ともいうべき虎について、さらに検討を加えたい。
先ず、『聊齋志異』「向杲」に見える「人間が虎になった」という記事について。人間が虎になったという特異な話は、唐の李景亮「人虎伝」に先立ち、既に『搜神記』と『搜神後記』に見えている。

江漢の域に獮人有り。其の先は稟君の苗裔なり。能く化して虎と為る。長沙に属する所の蛮県、東高の居民は、曾て檻を作り虎を捕へんとす。檻、発して明日、衆人共に往き之に格^{いた}れば、一亭長の赤幘大冠して檻中に在りて坐するを見る。因りて問ふ、君何を以て此の中に入る、と。亭長大いに怒りて曰く、昨、忽ち県に召され、夜雨を避け、遂に誤りて此の中に入る。急ぎ我れを出せ、と。曰く、君、召さるるに、当に文書有るべからざらん

や、と。即ち懷中の召文書を出す。是に於て即ち之を出す。尋で視れば乃ち化して虎と為り、山に上り走ぐ。

『搜神記』卷十二

また、『搜神後記』卷四にも次のような記事を載せる。周眡という者の下男に、虎になる術を身に着けた者がいた。妻と妹を伴つて山に入り、二人を高い木の上に登らせると、やがて一頭の大きな黄斑の虎が現れた。暴れ回り大きな声で咆哮するさまは非常に恐ろしかった。周眡が下男の体を調べてみると、髻の中に大きな虎を描いた紙があり、虎の近くには符が書かれていたという。長文に亘るので、該当箇所のみを次に示す。

魏の時、尋陽県の北山中の蛮人に術有り。能く人をして化して虎と作らしむ。毛色・爪牙・悉く真の虎の如し。郷人、周眡に一奴有り。山に入りて薪を伐らしむ。奴に婦及び妹有り。亦た与俱ともに行き、既に山に至る。奴、二人に語りて云く、汝且く高樹に上り、我の為す所を視よ、と。其の言の如くす。既にして草に入り、須臾にして一大黄斑の虎、草中より出づるを見る。奮迅吼喚し、甚だ畏怖す可し。二人、大いに駭く。良久して草中に還り、少時して復た還りて人と為る。二人に語りて云く、家に帰り慎しみて道ふこと勿れ、と。（中略）唯だ髻髪中に於て一紙を得たり。画くに大虎を作し、虎の辺に符有り。

『搜神後記』卷四

これまでの資料に基づいて、虎についてさらに述べれば、「諸を西山の麓に禱る」（虎痴）、「東郭の嶽廟に詣で、跪きて之に祝す。哭すれども声無し。何ばくも無くして一虎、外自り来たる」（趙城虎）、「雨暴かに作り、上下沾濡し、寒さと戦ふこと、頗る苦だし。既にして烈風四塞し、氷雹繼いで至り、身は忽然として痛癢復た覚ゆる能はず。嶺上に旧より山神の祠有り云々」（向杲）等の記述から、虎が登場する場面は、祠・嶽廟が舞台となり、風雨が吹き荒れる等の共通する内容となっているが、この事は今まで見てきた資料だけでなく、他にも多くの資料に散見しているから次に示そう。

郡城東嶽廟は南郭に在り。大門の左右の神は高さ丈余にして、俗名は鷹虎神なり。猙獰にして畏る可し。廟中の道士は任姓なり。鷄鳴する毎に、輒ち起きて焚誦す。(中略)方に山下に至れば一巨丈夫を見る。山自り上り来る。左臂に蒼鷹あり。適き与に相ひ遇ふ。近くに之を視れば、面は銅青色にして、依稀するに廟門中の習ひ見る所の者に似たり。

〔聊齋志異〕卷一「鷹虎神」

行くこと方に数十里、暴かに雨、忽ち集まる。途の側に危崖有り。夫妻、奔りて其の下に避く。少間くして雨止み、復た行くことを始む。纔かに数武に及び、崖石崩墜す。居人、遙かに両虎の躍り出で、兩人に逼り附きて没するを望む。

〔聊齋志異〕卷五「陽武侯」

歷陽に彭祖の仙室有り。前世云く、風雨を禱請すれば、輒ち応ぜざるは莫し。常に両虎有り、祠の左右に在り。今日、之を祠り^ま訖ふるの地には則ち兩虎の跡有り。

〔搜神記〕卷二

衡農、字は剽卿。東平の人なり。少くして孤なり。繼母に事へて至孝なり。常に他舎に宿す。雷風に値ふ。頻に虎の其の足を嚙むを夢む。農、妻を呼び、庭に相ひ出で、頭を叩くこと三たび下す。屋、忽然として壊れ、壓死する者、凡百餘人。唯だ豊(農)夫妻のみ免かるるを獲たり。

〔搜神記〕卷十二

このように、廟を拠り所とする「虎の神」がおり、人間の思いを虎に伝えているのである。このことは、清代の人々には周知の事だったようで、だからこそ「趙城虎」で虎の捕縛を命じられた李能が、なかなか虎を見つけれず知事の責め苦を受けた時、東郭の嶽廟に祈ったのである。いずれにしても、虎には他の動物とは異なる不思議な能力が備わっているという認識がなされていた筈である。また、虎の葬儀における行動についても「女郁疾を以て死す。屍を堂上に停む。虎、忽ち嗥哭して来たり、泪下ること雨の如し。送殮する者、皆な之を見る。繼いで玉を祖塋の側に埋む。虎、一日に巡視すること三たびす」(虎痴)、「嫗死す。虎、来たり堂中に吼ゆ。嫗、素より積む所あり。綽

として葬を営む可し。族人共に之を瘞^{うず}む。墳壘方に成らんとす。虎、驟かに奔り來たる。賓客尽く逃ぐ。虎、直ちに冢の前に赴き、嗥鳴雷動し、時を移し始めて去る。土人、義虎の祠を東郊に立て、今に至りて猶ほ存す」(趙城虎)というように、虎の高い倫理性・義侠心が目を引くが、これは『諸鐸』『聊齋志異』に限らず、『搜神記』卷十一にも次のような記述が見える。

王業、字は子香。漢の和帝の時、荊州の刺史と為る。部を出行する毎に、沐浴肅潔して以て天地に祈る。当に愚心を啓き佐け、百姓をして枉ぐることに有らしむること無かるべし、と。州に在ること七年、惠風大に行はれ、苛慝は作らず。山に豺狼無し。湘江に卒す。二白虎有り。頭を低れ尾を曳き、其の側らに宿衛す。喪去るに及び、虎、州境を躐え、忽然として見えず。民、共に為に碑を立て、号して湘江白虎の墓と曰ふ。(『搜神記』卷十二)

七年間にわたり民に善政を施したた荊州の刺史、王業が湘江で卒した時、二頭の白い虎が現れ、夜通しその亡骸の番をしたという。その後、虎の義侠に感じた民の手で、湘江白虎の墓として碑を立てたというのは、「虎、一日に巡視すること三たびす」(虎痴)、「土人、義虎の祠を東郊に立て、今に至りて猶ほ存す」(趙城虎)というのを想起させる。

以上の考察から、虎は古く六朝志怪の頃より、高い倫理性・靈性が備わった動物として位置付けられており、この考え方が清代の志怪小説まで継承されていることが分かる。いずれにしても、沈起鳳の『諸鐸』卷一「虎痴」は、『聊齋志異』卷五「趙城虎」・卷六「向杲」と『搜神記』卷十二・卷十四等の資料をもとにして書かれたと推測される。

『聊齋志異』卷八「象」は、象に拉致された粵の獵師の話である。獵師が山の中で休息して眠りこけてしまい、気が付くと象の群れに鼻で持ち上げられて連れ去られた。象は獵師に木に登って欲しい様子であった。やがて狻猊（獅子）が現われ、一頭の肥えた象を打ち斃して嚙みつこうとした。象たちは怯えて逃げる勇氣も失せ、ただ木の上を見上げて救いを求めているかのようであった。獵師は象の氣持ちが分かると、弩を發射し狻猊を一矢で斃した。すると象は獵師を乗せて歩き出し、抜け落ちた象牙が無数に埋まっている場所を教えた。獵師は象牙を括り、象の背中に乗せた。象はそれを背負つて山から送り出し、獵師は帰ることができたという。

粵中に獸を獵る者有り。矢を挟み山に如く。偶々臥し憩息して沈睡より覺めず。象の來たり鼻に攝（か）けて去らる。自分は必ず殘害に遭はん、と。未だ幾ならずして樹下に釈（お）置き、頓首して一鳴す。群象粉れ至り、四面旋繞し、求むる所有るが若し。前象樹下に伏し、仰ぎて樹を視、俯して人を視、其の登らんと欲するに似たり。獵者、意を解し、即ち足を以て象の背を踏み、攀援（よじのぼ）りて升る。樹の巔に至ると雖も、亦た其の意向の存する所を知らず。少時（しょうじ）して狻猊の來る有り。衆象皆な伏す。狻猊は一肥者を選び、意、將に搏ち噬（か）まんとす。象、戰慄し、敢へて逃ぐる者無し。惟だ共に樹上を仰ぎ、憐れみ拯ふを求むるに似たり。獵者、意を會し、因りて狻猊を望み、一弩を發す。狻猊、立に殪（たふ）る。諸象、空を瞻（み）、意は拝舞するが若し。獵者乃ち下る。象復た伏し、鼻を以て衣を牽き、其の乘らんと欲するに似たり。獵者隨ひ、身を其の上に跨れば、象乃ち行く。一処に至れば蹄を以て地に穴ほり、脱牙の無算なるを得。獵人下り、束治して象の背に置く。象乃ち負ひて送りて山より出で、始めて返る。

（『聊齋志異』卷八「象」）

この『聊齋志異』「象」とよく似た話は『搜神記』卷二十にも次のような記事が見える。

蘇易は廬陵の人なり。産を看るに善し。夜、忽ち虎の取る所と為る。行くこと六・七里にして大壙に至る。易を

唇くちばしきて地に置き、蹲りて守る。見れば牝虎有り。当に産むべきも、解するを得ず。匍匐して死せんと欲し、輒ち仰いで易を視る。之を怪しむも、乃ち為に之を探り出せば、三子有り。生み畢はれば、牝虎、易を負ひて還す。

再三、野肉を門内に送る。

（『搜神記』卷二十）

お産の世話が上手な蘇易という女性がある夜虎に捕まり、大きな洞穴に連れて来られた。そこには難産にのたうち回る牝虎があり、助けを求めるように見上げるのであった。牝虎は蘇易の手助けによつて三匹の子どもを無事産み終わると、背中に乗せて送り返した。その後は再三、野生動物の肉を家の門の中に届けたという。

さて、今見て来たこの二つの説話は、「象」が「虎」に置き換えられている他は、動物が人間に救いを求めるために拉致し、目的を遂げると背中に乗せて元の場所に送り届け、さらに返礼をするという一連の内容が共通している。（注4）

説話の独創性から推測すると、内容が偶然に一致したとは考えにくく、『聊齋志異』卷八「象」はこの『搜神記』卷二十の資料を参考にして書かれたものと思われる。ところが『聊齋志異』卷十二「二班」には、さらに次のような話が見える。少々長文に亘るが「二班」の全文を掲げる。

殷元礼は雲南の人なり。鍼灸の術を善くす。寇乱に遇ひ、深山に竄入す。日は既に暮れ、村舎は尚ほ遠し。虎狼に遭ふを懼れ、遙かに前途を見れば兩人有り。疾く之を趁おそふ。既に至る。兩人問ふ、客は誰ぞや、と。殷乃ち自ら族貫を陳ぶ。兩人、拱敬して曰く、是れ良医の殷先生なるか。山斗を仰ぐこと久し、と。殷輒じて之に詰すれば、二人自ら言ふ、班姓なり。一は班爪たり、一は班牙たり、と。便ち謂ふ、先生、余も亦た難を石室に避く。幸ひに棲宿す可し、敢へて玉趾に屈せん、且つ求むる所有り、と。殷、喜んで之に従ふ。

俄かに一処に至る。室は巖谷に傍らす。柴を爇やき燭に代ふ。始めて二班を見るに、容軀は威猛なり。良善に非ざるに似たるも、之く所無きを計り、即ち亦た之を聴く。又た榻上に呻吟するを聞く。細審すれば、則ち一老嫗偃

臥す。苦しむ所有るに似たり。何の恙なるかと問へば牙曰く、此の故を以て先生を敬求す、と。乃ち火を束ねて榻を照らし、殷の視るを逼る。見れば鼻下口角、両贅瘤有り。皆な大なること碗の如し。且つ云ふ、痛くして触る可からず、飲食を妨礙す、と。殷曰く、易きのみ、と。艾を出だして之を團まるくし、灸数十壮を為す。曰く、夜を隔てて愈ゆ、と。二班喜び、鹿を焼き客に餉かる。並びに酒飯無く、惟だ肉一品あるのみ。爪曰く、倉卒にして客の至るを知らず。望むらくは、輜褕を以て怪しむを為すこと勿れ、と。

殷、餐に飽きて眠る。枕は石塊を以てし、二班は誠樸なりと雖も、粗莽なること懼る可し。殷、転側して敢へて熟眠せず。天、未だ明けず。便ち媼を呼び、患ふ所を問へば、媼は初めて醒めたり。自ら捫なづれば、則ち瘤は破れ創と為る。殷、二班を促して起こし、火を以て就き照らしめ、敷くに葉屑せつを以てす。曰く、愈いえり、と。拱手して遂に別る。班、又た焼鹿一肘を以て之に贈る。

後三年、耗こ無し。殷、適々故を以て山に入れば、二狼の道に当るに遇ふ。阻みて行くを得ず。日既に西し、狼又た群がり至る。前後に敵を受け、狼、之を撲うち仆す。数狼争ひて鬻り、衣は尽く碎く。自分は必ず死せん、と。忽ち両虎驟かに至り、諸狼は四散す。虎怒り、大いに吼ゆ。狼、懼れ尽く伏するも、虎は悉く之を撲殺し竟に去る。殷、狼狽して行くも投止無きを懼る。一媼の來たるに遇ふ。其の状を睹て曰く、殷先生、苦を喫せり、と。殷、戚然として状を訴ふ。問ふ、何の見識ぞ、と。媼曰く、余は即ち石室中に瘤を治すの病軀なり、と。殷、始めて恍然たり。便ち寄宿を求む。媼引き去り、一院落に入る。

燈火已に張る。曰く、老身、先生を伺ふこと久し、と。遂に袍袴を出だし、其の敝敗に易ふ。漿つちを羅ね、酒を具へ、酬い勧むるに諄切たり。媼、亦た陶碗を以て自ら酌む。談・飲俱に豪なること巾幘に類せず。殷問ふ、前日の両男子、老姥に係ること何人ぞや。胡ぞ以て見えざる、と。媼云く、両兒は先生を逆ひかへに遣るに、尚ほ未だ帰

復せず。必ず途に迷ふ、と。殷、其の義に感じ、飲むを縦にし、沈酔するを覚えす。酣にして座間に眠る。既に醒むれば、已に曙たり。四顧すれば、竟に屋簷無く、巖石上に孤坐す。巖下に喘息すること牛の如きを聞く。近づき視れば、則ち老虎の方に睡りて未だ醒めざるなり。啄間に二つの癰痕あり。皆な大なること拳の如し。駭くこと極まれり。蹤を潜めて遁る。始めて両虎は即ち二班なるを悟るなり。

〔聊齋志異〕卷十二「二班」

鍼灸の術に巧みな雲南の殷元礼は、ある時賊軍に追われ山中深く逃げ込んだ。途中、班爪と班牙と名乗る二人の男に出会い、石室に案内された。そこには、鼻の下と口の角に大きな瘤が二つもある老婆が寢台の上で苦しんでいた。治療を求められた殷元礼は、すぐに艾を取り出して丸め、灸を何十回もすえ、一晚で治してやった。

それから三年の後、殷元礼が用事で山に入ったところ狼の群れに襲われ、もう助からないと観念した。するとそこへ突然二頭の虎が現われ、狼をすべて打ち殺して引き上げて行つた。殷元礼はうろたえ、宿の心配をしながら歩いていると、一人の老婆と出会つた。それは以前、石室で瘤の治療をした老婆だった。老婆は自宅に殷元礼を案内し、懇ろに着替へと酒の準備をして心からもてなした。三年前に出会つた班爪と班牙は自分の息子で、先程殷元礼を迎えに行つたまま、まだ戻らないのだという。殷元礼は、この親子の義理堅さに心を打たれ、思う存分飲んで泥酔し、その場で眠ってしまった。

やがて目を覚ますと、すでに夜が白々と明け始めていた。あたりを見回すと、どこにもさきほどの家はなく、大きな岩の上に一人で座っていた。近くに年老いた虎が牛のようないびき声を立てて寝ていて、口のあたりに傷跡が二つあった。殷元礼は腰を抜かさんばかりに驚き、足音を忍ばせて逃げ出した。そこではじめて、前夜、狼の群れから命を救ってくれた二頭の虎は、班爪と班牙だったことを悟つた、というのが「二班」のあらすじである。

医療に従事している人間が重篤な病の虎に治療を施し、その後恩返しを受けるという「二班」の「虎の恩返し譚」

は、既に見た『搜神記』卷二十と良く似ている。ただし「二班」は説話の物語性という点で明らかに進化しており、冒頭の虎との出会いについても、拉致されたのではなく、戦乱の避難先での出来事という自然な流れになっている。

次に「虎の恩返し」については、「数匹の狼が先を争うように噛みつき、衣服はずたずたになった」その時、二頭の虎が突然現れた、という緊迫感漂う描写がなされている。これを「野生動物の肉を家の門の中に届けた」という『搜神記』卷二十の記述と比べれば、読者を意識した読み物として、完成度が各段に高くなっていることはいうまでもない。また「二班」の記述についてさらに指摘すると「既に醒むれば已に曙たり。四顧すれば竟に屋簷無く、巖石上に孤坐す」（目を覚ますと、すでに夜が白々と明け始めていた。あたりを見回すと、どこにもさきほどの家はなく、大きな岩の上に一人で座っていた）というように、屋敷が一晚で跡形もなく消え去るという表現は『聊齋志異』卷一「新郎」・卷三「道士」「犬燈」、卷六「河間生」「雲翠仙」「惠芳」「蕭七」「鵠異」「八大王」・卷七「閻羅宴」・卷十一「三仙」などに屢々見られる蒲松齡が好んで使う常套句であるが、実はこのような記述は既に『搜神記』卷十六に「未だ数歩を逾えずして舎宇を見ず、惟だ一冢有るのみ」と見えている。

一方、この「二班」の内容と同様、虎が人間に化ける話は、『閻微草堂筆記』卷九「如是我聞」にも見えている。先母張太夫人、嘗て一張媼を司炊に雇ふ。房山の人なり。西山の深处に居る。其の郷に、貧極まり家を捨て食を覓むる者有りと言ふ。素より未だ外出せず。行くこと半日、即ち路に迷ふ。石径崎嶇、雲陰り晦暗、適く所を知る莫し。姑く樹下に枯坐し、天晴れ南北を辨ずるを俟つ。忽ち一人、林中自り出で、三四人之に随ふ。併びに猓獐偉岸、常人に異なる有り。心に、山靈に非ざれば即ち妖魅たるを知る。隱避すること能はざるを度る。乃ち身を投げ、叩拝し、泣きて苦しむ所を訴ふ。其の人、惻然として曰く、爾怖おそがること勿れ。汝を害せざるなり。我れは是れ虎の神なり。今、諸虎の為に食料を配るなり。虎の人を食ふを待ち、爾其の衣物を収めよ。自活する

に足らん、と。因りて引きて一処に至る。噉然として長嘯すれば、衆虎空集す。其の人、手を挙げて指揮す。

語は啁晰して辨ず可からず。俄かに俱に散去す。惟だ一虎のみ留まり、叢莽の間に伏す。俄かに荷担して嶺を度る者有り。虎、躍起して搏たんと欲するも、忽ち辟易して退く。少頃して一婦人至る。乃ち搏へて之を食ふ。其の衣帶を撿^{しら}べ、数金を得れば取りて以て之に付す。

且つ告げて曰く、虎は人を食はず。惟だ禽獸を食ふのみ。其の人を食ふは、人にして禽獸なる者のみ。大抵の人、天良未だ泯^{ほろ}びざる者は、其の頂上に必ず靈光有り。虎、之を見れば即ち避く。其の天良漸^つき滅ぶ者は、靈光全く息む。禽獸と異なる無し。虎、乃ち得て之を食ふ。頃前の一男子は、凶暴にして人理無し。然れども、攘^{ぬす}み奪ひて得る所、猶ほ其の寡嫂孤侄を恤^{うれ}ひ、飢寒せざらしむ。是の一念を以て、靈光は煜煜として彈丸の如し。故に虎は敢へて食はず。後の一婦人は、其の夫を棄てて私かに嫁ぎ、又た其の前妻の子を虐げ、身は完膚無し。更に後夫の金を盗み、以て前夫の女に貼る。即ち懷中携ふる所、是なり。是の諸惡を以て、靈光は消え尽き、虎之を視れば、復た人身に非ず。故に啖^{くら}ふ所と為る。爾、今我れに遇ふを得るは、亦た以て善く繼母に事へ、妻子の食を輟^やめて以て養へばなり。頂上の靈光は高さ尺許りなり。故に我れ得て之を佑く。爾の叩拝し求哀するを以てに非ざるなり。勉めて善業を修めよ。当に尚ほ後に福有るべし、と。因りて帰路を指示す。

『閼微草堂筆記』卷九「如是我聞(三)」

生活の困窮に耐えかねて家を棄て、食べ物を探しにさまよった者が、道に迷ったあけく険しい岩山に迷い込んだ。木の下で途方に暮れていると、そこへ獐猛な顔つきで大きな体の男が、数人の男を引き連れて現れた。頭を地面に擦り付け、窮状を訴えて命乞いをする、大男は「怖がらなくて良い。わしは虎の神で、これから虎たちに食料を配る所だ。お前は食われた者の持ち物を手に入れよ。今後は生活が出来るようになるだろう」と言い、ある場所へ連れて

行った。大きな声で長く吼えたと、虎たちが群がりやって来た。虎の神が手を挙げて指示したが、何を言っているのか分からなかった。そして一頭だけを残して散っていった。虎は草むらに身を伏せ、通行人を吟味するかのようであったが、やがて一人の婦人が通りかかると襲いかかって食べてしまった。虎の神は女の着物や帯の間を調べ、数金を見つけると男に渡して言った「虎は人間を食わない。禽獣だけを食うのだ。人間を食うのは、人間でありながら禽獣と変わらない者だけなのだ。人間は、天から授けられた良い心を失っていない者は、頭の上に必ず霊光がある。天から授けられた霊光が尽きてしまった者は、頭の上の霊光が全くなっているので、禽獣と同じになる。そうすると、虎は食えるのじゃ」。「お前が今、わしに会うことが出来たのは、お前がよく継母に仕え、妻子には食べさせなくても継母には食べさせたから、頭上の霊光は一尺ほどの高さになっている。だからわしはお前を助けたのだ。お前が土下座して命乞いをしたからではない。善行を積むことに励めば、後できつと良い事があるに違いない」。そして帰り道を教えてくれた。

『閼微草堂筆記』巻九「如是我聞」のあらすじは以上の通りで、主題は「虎の恩返し譚」ではなく、いささか儒教色が盛り込まれた「虎の神の話」になっている。ここで想起されるのが、『搜神記』巻一「董永自売」説話と『搜神後記』巻五「白水素女伝説」であろう。この二つの説話は、あまりにも有名であるから資料は示さないが、話の趣旨は同一である。すなわち、貧しく身寄りもない若者が、非法を履まず懸命に働く姿を天帝が憐み、救いの女神を地上に遣わして生活を助けた後、女神は天に帰って行くという内容である。『搜神記』の董永は、父の葬式代金を工面するため、自らは身を売り奴隷となるなど、両説話とも儒教的色彩が強調されている点は、この『閼微草堂筆記』巻九と同じである。

ところで、『閼微草堂筆記』巻九に見える虎の神の話は、既に示した『聊齋志異』巻一「鷹虎神」にも記載がある。

すなわち、郡城の東嶽廟の大門の左右に「鷹虎神」と呼ばれる神像があり、ある時泥棒が廟に潜入して錢三百を盗んだところ、左腕に蒼い鷹を止まらせた大男が山から下りて来たが、顔は緑青色で、あたかも廟の門内で見慣れた神像そっくりであつたという。虎の神が人間の大男の姿をしているというのは、この『閔微草堂筆記』の資料と共通していることが分かる。^(注5)

考察を「二班」に戻すと、「二班」について留意すべきは、「虎が人語を解する人間に化けている」ことである。「人間が虎になった」話は、前項で考察した『聊齋志異』巻六「向杲」・『搜神記』巻十二・『搜神後記』巻四の資料にも見えるように、古く六朝志怪から語られている。これに対して「虎が人間に化ける」という話は、六朝志怪等の古い文献には見当たらない。またさらに、「二班」及び『閔微草堂筆記』巻九「如是我聞」(三)には「人間に化ける」だけでなく「人語を解する」という要素を取り入れている点からも、清代の志怪小説ならではの進化が見て取れるであらう。

ここで問題となるのが『聊齋志異』と『閔微草堂筆記』の先後についてであるが、紀昀が生まれたのは一七二四年で、蒲松齡(一六四〇―一七一五)の没後であるから、『聊齋志異』が先行することは確かである。「二班」には登場人物の心理描写の書き込みや科白の細やかさなど、『聊齋志異』特有の完成度の高さが伺える。紀昀が蒲松齡の作風を批判した事については小論の冒頭で紹介した通りであるから、『閔微草堂筆記』巻九「虎の神」の話は、「二班」をもとにして書いたものではないことになる。そうであるならば、蒲松齡と紀昀の執筆当時、それぞれの手元には虎に関する内容の資料、具体的には「虎の神」に関する資料に加え、高い倫理性を備えた虎の説話資料があらかじめ用意されていて、それをもとに『聊齋志異』と『閔微草堂筆記』が書かれたのではあるまいか。つまり、蒲松齡は『搜神記』巻二十を参考にして『聊齋志異』巻八「象」を書き、続いて手元にあったこのような虎の資料をもとに「二班」

を書いたのであろう。その後、紀昀も同様に手元の虎の資料を参考にしつつ、さらに主題を変えて「虎の恩返し」ではなく儒教色を前面に押し出した『閱微草堂筆記』巻九の「虎の神」を書いたという次第なのではあるまいか。なぜなら、紀昀の『閱微草堂筆記』には、従来の小説を土台とし、さらに独自の儒教観を濃厚に反映させて全く別の作品に仕立て直した作品が他にも見つかるからである。その典型的なものとしては『閱微草堂筆記』巻四に見える武邑の道学者の話が挙げられる。これは今考察した「虎の神」と同様の手法が用いられており、白行簡「奇夢」を土台にしつつも、「幽体離脱」という「奇夢」の主題を変更し、これに代えて紀昀独自の思想が盛り込まれた作品となっている。それは、次のような話である。

武邑の某という道学者が、妖怪が出ることで知られる寺の経蔵の前で深夜酒宴を催し、酣となるに及んで『西銘』の万物一体の道理を議論した。道学者をもつて自ら任ずる某は妖怪を怖れることなく談じ続け、その場に居合わせた者も皆、夜が更けるのも気付かず、衿を正して某の話に聞き入っていた。すると突然、経蔵の上から激しく叱りつける声とともに、石垣の瓦が投げつけられ、雷のような地響きをたてたという。

忽ち閣上に厲声あり、叱りて曰く、時、方に飢疫す。百姓類の死亡する有り。汝は郷宦たり。既に早く義拳を倡へ、粥を施し、薬を捨くを思はざれば、即ち応に此の良夜を趁ひ、戸を閉め安眠すべし。尚ほ自ら了漢たるを失はざらん。乃ち虚談・高論し、此に在りて、民は胞なり、物は与なり、と講ず。知らず、所謂、胞与とは安くに在るか。就令講ずること天明に至れば、還た飯餐を作す可きか。薬服を作す可きや否や。且く汝に一磚を撃たん。汝、再び講ぜよ。邪は正に勝たず、と。忽ち一城磚、飛び下る。声は霹靂の若し。杯盤・凡ての案、俱に碎く。某公、倉皇として走り出づ。曰く、程朱の学を信ぜざるは、此れ妖の妖たる所以か、と。徐ろに歩み太息して去る。

（『閱微草堂筆記』巻四「灤陽消夏錄」）

一方、「奇夢」は、あらためて述べるまでもなく、唐の天后年間、劉幽求という朝邑の丞が夜中に仏堂院の側を通りかかると、自分の妻が寺の中で十数人の兒女と歠談飲食しているのが見えた。これを訝り瓦を投げ入れると、そこに居た者たちは掻き消すように姿を消した。その後、帰宅した劉幽求が今体験した出来事を妻に話したところ、妻もまた夢の中で見知らぬ十数人の者と寺院の庭で会食していた。その最中、何者かが外から瓦礫を投げ入れ、盃や皿が飛散したところで目が覚めた、と語ったという話である。

天后の時、劉幽求、朝邑の丞たり。嘗て使を奉じ夜歸る。未だ家に及ばざること十余里にして、適々仏道院有り、路其の側に出づ。寺中に歌笑歠洽するを聞く。寺垣短欠して尽く其の中を觀るを得たり。劉、身を俯して之を窺へば、十数人の兒女雜坐し、盤饌を羅列し、之を環繞して共に食らふを見る。其の妻の坐中に在りて語笑するを見、劉初め愕然として其の故を測らず。之を久うし、且つ其の当に此に至るべからざるを思ふも、復た之を捨つること能はず。又熟視すれば、容止言笑、異なる無し。將に就きて之を察せんとするも、寺門閉ざされて入るを得ず。劉、瓦を擲げて之を撃てば、其の疊洗に中つ。破迸走散し、因りて忽ち見えず。劉、垣を踰えて直ちに入り、從者と同一視れば、殿廡人無く、寺扁故の如し。劉、訝ること益々甚だし。遂に馳せ歸る。其の家に至る比ころはひ、妻方に寝ぬ。劉の至るを聞き、乃ち寒暄を叙しおは訖る。妻笑ひて曰く、向に夢中に數十人と一寺に遊ぶ。皆な相ひ識らず。殿庭に会食す。人有り、外自り瓦礫を以て之を投じ、杯盤狼藉たり。因りて遂に覺めたりと。

（白行簡「奇夢」）

右に示したこの二つの作品には、深夜、寺院で宴会をしている最中に瓦を投げつけられる、という特徴的な行為が共通して描かれている点に注目したい。さらに「杯盤」という語が共通して使われるなど、破壊された宴席のあり様と、その場に居合わせた者の狼狽ぶりも酷似している。これらの事から『閼微草堂筆記』巻四に見える武邑の道学者

の記事は、白行簡の「奇夢」をもとに書かれたのは明らかであるが、紀昀の狙いは「奇夢」の主題ともいふべき幽体離脱ではなく、志怪小説の体裁を借りた宋代の思想である道学への批判であつたと思われる。この『閱微草堂筆記』巻四の中で妖怪に仮託して語られるのは、紛れもなく紀昀自身の官僚としての哲学であつた筈である。そうであるとすれば、この著作態度こそは、既に見てきた『閱微草堂筆記』巻九「如是我聞」の中で、虎の神に儒家思想を語らせると同一の発想による紀昀ならではの作品であると考えられる。

三

『聊齋志異』巻六「餓鬼」は、馬永父子の一代記である。無頼の徒、馬永はある日食糧を攫つて代金を支払わず、店の者に酷い目に遭つていた。これを憐れんだ朱翁は錢數百を恵んだことがあつた。馬永はその後悪行を繰り返したため訴えられ、獄中死した。するとその夜、朱翁の夢に馬永が現われ、恩返しに來た旨を告げた。朱翁が目覚ますと、妾が男児を生んだことから、馬永の生まれ変わりであると悟り、その子を馬兒と名付けて育てたというのが一篇の趣旨である。『聊齋志異』には、これとよく似た話が巻四「蹇償債」・巻八「錢卜巫」にも見えているが、とりわけ注目すべきは、「蹇償債」の内容が『子不語』巻一「大樂上人」と酷似していることである。すなわち「餓鬼」と同様、生前に施しを受けた者が死後恩返しに現われ、驢馬に生まれ変わったという共通する内容を骨子としている。考察の手順として最初に『聊齋志異』「蹇償債」と『子不語』「大樂上人」について検討を試みる。次に「蹇償債」と「大樂上人」の全文を掲げる。

李公著明は慷慨施しを好む。郷人某は公の室に傭居す。其の人、少くして遊惰、農業を操ること能はず。家は窶

清代志怪小説の形成について

貧なり。然れども小きより技能有り。常に役務を為し、毎に之に^{たま}實ふこと厚し。時に晨炊無く、公に向ひ哀乞す。公、輒ち給するに升斗を以てす。一日、公に告げて曰く、小人日々厚恤を受く。三四の口、幸ひ餓殍せず。然れども、曷ぞ以て久しくす可き。主人に乞ふ、我れに綠豆一石を貸せ、資本と作さん、と。公、忻然として之に授ければ負ひ去る。年余にして一も償ふ所無し。之に問ふに及べば、豆質は已に蕩然たり。公、其の貧なるを憐み、亦た置きて索めず。

公、蕭寺に読書す。後三年余、忽ち夢に某来たりて曰く、小人、主人に豆直を負ふ。今、来たりて投償せん、と。公、之を慰めて曰く、若し爾の償を索むれば、則ち平日負ふ所の欠くる者は、何ぞ数算す可けん、と。某、惘然として曰く、固より然り。凡そ人、為す所有りて人に受くれば、千金は報ぜざる可きなり。若し端無くして人の資助を受くれば、升斗すら且つ昧きを容れず、況んや其の多きをや、と。言ひ已^お竟はりて去る。公、愈々疑へり。既にして家人、公に白す、夜牝驢一駒を産む。且つ修偉なり、と。公、忽ち悟りて曰く、駒の某為ること母きを得んや、と。数日を越して帰り、駒を見、戯れに某の名を呼べば、駒は奔りて赴くこと知識有るが如し。此れ自り遂に以て名と為す。

公、乘りて青州に赴く。衡府の内監、見て之を悦ぶ。願はくは重價を以て之を購はん、と。議直ちに未だ定まらず。適々公、家中の急務を以て待つに及ばず、遂に帰る。又た歳を^こ逾し、駒、雄馬と同檻し蹊骨を齧折す。療す可からず。牛医有り、公の家に至る。之を見、公に謂ひて曰く、乞ふ駒を以て小人に付せ。朝夕療養し、需むるに歳月を以てすれば、万一に痊^いゆるを得ん。直るを得れば、公と之を剖分せん、と。公、請ふ所の如し。後数月、牛医驢を^う售る。錢千八百を得たり。半を以て公に献ず。公、錢を受けて頓悟す。其の数、豆の價に適符するなり。噫、昭昭の償、冥冥の償、此れ以て勸むるに足れり。

洛陽水陸庵の僧、大樂上人と号す。財に饒かなり。其の隣人、周某、県役に充る。家貧しく、税租を承催すれば、皆な之を侵蝕す。比期に逢ふ毎に、輒ち上人に向ひ借貸す。数年間積りて七兩に至る。上人、其の償還するに無力なるを知り、復た取索せず。役、頻りに恩に感じ、相ひ見れば必ず曰く、吾れ上人の恩に報ゆる能はず。死すれば当に驢馬と為り、以て報ゆべし、と。

居ること何も無くして、晩に人有り門を叩くこと甚だ急なり。誰為るかと問へば、声に応じて曰く、周某なり、来りて恩に報ゆるのみ、と。上人戸を啓けぱ了として人を見ず。以て相ひ戯むる者有りと為す。是の夜、畜ふ所の驢、一駒を産む。明旦役を訪へば、果たして死す。上人驢の傍に至れば、産駒首を奮ひ、足を翹げ、相ひ識る者の若し。

『子不語』卷一「大樂上人」

『聊齋志異』「蹇償債」を一読して気付くのは、話の筋に飛躍があることである。人情に篤い李公著明の家に雇われて住んでいた郷人某は、怠け者で貧しかったため、李公は長年経済的援助をしていた。するとある日突然、李公の夢に郷人某が現れて「三年前に借りた大豆の代金をお返ししたい」と伝えた。李公が、これまで貸した金額を計算したらとうてい返せないであろうと慰めた。その夜、驢馬が子驢馬を一頭産んだという報を受けた李公はすぐに、その驢馬は郷人某に違いないと悟ったという。しかし、その理由は分かりにくい。なぜなら『子不語』「大樂上人」のように、大樂上人から長年の恩義を受けた周某が「死すれば当に驢馬と為り、以て報ゆべし」つまり、「死んだら驢馬になつて、これまでの御恩に報いたい」といった意思表示がないばかりか、郷人某が死亡したという記述がどこにも見当たらないからである。

また「蹇償債」の構成について見ると、「大樂上人」は、周某が驢馬に生まれ変わった場面で一篇が終了しているのに対し、「蹇償債」では、某が驢馬に生まれ変わった話に引き続き、さらに驢馬にまつわる売買譚へと話が展開し

ている。既に存在する資料に基づいて作品を書く場合における一般的な傾向として、元の資料に新たな要素を付加してゆく事から、勢い最初の資料よりも饒舌になる傾向は免れない。そこで今指摘した二つの事を考え合わせると、「蹇償債」が「大楽上人」をもとにして書かれたという一応の推論が成り立ちそうであるが、事実はそうではない。

『聊斎志異』と『子不語』の先後については、蒲松齡の生没年が一六四〇～一七一五年であり、袁枚が一七一六～一七九七年であるが、『聊斎志異』は蒲松齡の死後五十一年を経た乾隆三十一（一七六六）年、嚴陵の太守、趙起杲が鮑以文とその他四人の協力によって始めて青柯亭本として刊行されたことは、すでに先学の指摘するところである。また、袁枚が『子不語』を執筆したのはその晩年、六十歳前後と言われているから、蒲松齡が「大楽上人」をもとに「蹇償債」を書いたわけではないことは明らかで、「蹇償債」を分かりにくい作品たらしめている記述の不備にかかる原因は、この問題とは別のところにあることになる。

推測するに、「施しを受けた者が死後恩返しに現れ、驢馬に生まれ変わる」という話の大元になる資料が本来存在していて、それをもとにして「蹇償債」と「大楽上人」が別箇に書かれたのではあるまいか。資料にまつわるこれと同種の問題については既に前項で、蒲松齡の『聊斎志異』と紀昀の『閱微草堂筆記』が書かれた背景に、志怪に関連する大元となる共通の資料が存在していた可能性を指摘した。これもまた同様に『聊斎志異』と『子不語』が、それぞれ独自に書かれたという次第ではあるまいか。

この推論を裏付ける資料として、『聊斎志異』巻八「錢卜巫」が挙げられる。「錢卜巫」は金持ちの某翁が、夏商という貧しい者に同情し、大金を貸し与え商いをさせるが、いつも元手を欠いていた。田畑と家売り払って借金を返済しようとする夏商に対して翁は不憫に思い、さらに多額の金を貸すのだった。夏商は翁に向かって「十数金すら尚は償ふ能はず、奈何ぞ来世の驢馬の債を結ばんや」（十数金でさえお返しできないのに、どうして来世、驢馬に生ま

れ変わらなければ返せぬようなお金を拝借できましようか」と答える。「驢馬に生まれ変わって債務を償う」という記述は、驢馬に関する記事が一切見えない「錢卜巫」にあつて何の脈絡もなく出現する句であり、いかにも唐突で違和感を覚える。これを要するに、「錢卜巫」におけるこのような違和感もまた、「蹇償債」や「大樂上人」の元になった資料を念頭に書かれたことに由来するものと推測される。「蹇償債」と「大樂上人」の関係という問題についての筆者の推論を側面から裏付ける一助となるであろう。

四

陳玄祐「離魂記」は唐代を代表する伝奇として知られ、後世の志怪小説に多大な影響を与えている。「離魂記」から約六百年後、明代に入り木版印刷による小説の出版が始まり、読者を意識した娯楽性を盛り込む必要に迫られると、記録文学という伝統的な概念から大きく逸脱し、作者の手によって創作を加えるという、従来にない意識が芽生えた。「離魂記」に描かれている男女の駆け落ちや幽体離脱といった要素は、娯楽小説を創作する際、絶好の材料となった筈である。明代の『剪燈新話』『金鳳釵記』、清代の『子不語』巻六「喀雄」には、いずれも「離魂記」と同旨の駆け落ち譚が描かれていることから、「金鳳釵記」や「喀雄」が「離魂記」の影響を受けて書かれたことは疑いようがない。しかし、清代に入ると『子不語』『喀雄』では、駆け落ち譚が一篇の骨子を成しているものの、「離魂記」「金鳳釵記」以来の定番ともいふべき幽体離脱は姿を消し、これに代わる新たな説話の構成要素が生み出されているのである。そこで次には『子不語』巻六「喀雄」を取り上げ、この問題の検証を行う。資料は少々長文にわたるが、最初に「喀雄」の全文を次に掲げる。

喀雄、姓は楊。父は守備を作すも早く亡ぶ。表叔、周某は副將を作す。河州に鎮たり。其の孤なるを怜れみ、之を撫養す。周に女有り。年は相ひ若く。雄の少年にして聡秀なるを見、頗る之を愛す。時に飲食を与にす。周家は法、甚だ嚴なれば、卒に他事無し。務子なる者有り。亦た周の戚なり。書齋に直宿す。夏月、雄、熱きに苦しみ、月下に徘徊す。周の女の冉冉として至るを見、遂に与に懽を成す。次の日、内に入り、女の曉に粧ふを見、雄、之に目して笑へば、女も亦た笑ひて之を迎ふ。自後、日として至らざる無し。務子、其の房中に笑語するを聞き、疑ひて之を窺へば、雄と周の女と相ひ狎るるを見、心大いに妬む。密かに周公に白す。周、宅に入り、其の夫人を讓む。夫人曰く、女兒は夜夜、我と同床す。焉んぞ此の事有らん、と。周、終に疑ひを為すを以て他事に借り、雄を杖して之を遣る。

雄、依る所無く、身を蘭州の古寺中に棲ひす。一日、女忽ち至る。帶び来る輜重は甚だ富めり。雄、驚き且つ喜び、何に従りて来るかを問ふ。曰く、我が叔父と同に来る、と。蓋し、周公の弟にして、名は鎔なる者、亦た武官なり。方に蘭州の守備に陞る。雄、深く信じて疑はず。女と居ること半月、揚揚として富人の如し。

叔、任に到る後、諸に塗に遇ふ。喜びて曰く、姪は此に在るか、と。曰く、然り、と。叔、馬に策して其の堂に登る。姪婦、出て拝すれば乃ち周の女なり。大いに驚き故を問へば、雄、具に之を言ふ。鎔曰く、予れ来る時、署中に女を失ふ事を聞かず。豈に吾が兄、之を諱むか、と。

居ること数日、公事に借り、河州に回り、備に其の事を述ぶ。周、大いに駭き曰く、吾が女、宛然として室に在り。頃く且に飯を同にす。那ぞ此の事有らん。或ひは、其れ狐仙の冒托する所なるか、と。夫人曰く、其の狐狸をして我が女の名を冒托し、我が閨門を玷すよりは、竟に真の女を以て之に妻はせ、渠の如何を見るに如かず、と。

周兄弟二人、大いに以て然りと為し、即ち雄を招き帰らせ、親と成す。合卺の夕べ、西寧の女、先づ已に房に在り。雄、茫然として措く所を知らず。女、笑ひて之に謂ひて曰く、何事か張皇する。兄は狐なり。実に徳に報ゆるを為さんとして来る。令祖、將軍と作りし時、嘗て土門関に獵す。兄、矢に貫かれ、擒にせらる。令祖、矢を抜き之を縦^{ゆる}す。屢々恩に報いんと欲するも、従りて手を下す無し。近ごろ、郎の周の女を愛すれども得ざるを知り、故に來り氷人と作り、以て汝に償ふ。願はくは、亦た子と周の女と夙縁有らんことを。然らずんば、兄も亦た力を為す能はざるなり。今、媒已に成る。兄、去らん、と。倏然として見えず。

（『子不語』卷六「喀雄」）

「離魂記」と『子不語』「喀雄」を比較すると、既に述べたように若い男女の恋愛から發展する駆け落ち譚であり、共通点も多い。一つは両者とも、若くて聡明な男と彼を慕う女が登場するが、恋の行く末を悲観して他所に逃れた男のもとに女が後を追つて来る事、そして大団円には幸福な結末で終わる事である。

しかし、小説としての進化の過程も読み取れる。「離魂記」では王宙に恋焦がれた倩娘は、逢いたい一心で幽体離脱し、王宙のもとに行く。一方、『子不語』「喀雄」では「離魂記」に描かれているような若い男女の純粋な恋愛譚ではなく、冒頭から見られる露骨な愛欲描写は読者を困惑させるのであるが、実は女の正体は、以前、男（喀雄）の祖父に命を助けられた狐であつて、周家の娘を愛しているながら結婚できずにいる男（喀雄）を手助けするために術を使い、周家の娘に化けて駆け落ちを図る。駆け落ちの相手が狐であると家人に気付かせ、家の体面を汚されるよりは、娘を嫁に出して狐の出方を見た方が良いという判断をさせたのである。結果、喀雄はめでたく本物の周家の娘と結婚することが出来たという結末である。つまり「喀雄」の主題は「狐の恩返し」であり、「離魂記」の「幽体離脱」「純愛」からすり替えて、娯楽小説として見事な手法で再構築しているのである。「恩返し」という主題は古く『搜神記』

等に「亀の恩返し」の話が多数見えるように志怪小説の定番である。やがて清代になると『聊齋志異』などには「虎の恩返し」が頻繁に登場するが、このことについては既に考察した通りである。

『子不語』『喀雄』が「離魂記」をもとにした創作であると考える根拠としてさらに言えば、「離魂記」はその冒頭に「天授三年」のような具体的な日付が記され、末尾には四十年後の子孫に関する具体的な記述とともに、作者の陳玄祐が、この奇譚が作品の主人公、張鎰の父方の叔父、張仲規から直接聞いた話であると記すように、その具体的な記録は、読者に物語の信憑性を訴えていると言える。これに対して『子不語』『喀雄』に登場する女性については具体的な名ではなく「周の女」とのみ記され、また、登場人物についても役職名が記されていない点などからも『子不語』『喀雄』の虚構性が強く感じられよう。

結 語

志怪小説は記録文学に端を発し、怪異現象の継承をその使命とするもので、唐代には名称を変えて伝奇と呼ばれ大いに流行したことはよく知られている。その後、明代に一時衰退した志怪小説は、清代に文言によって書かれるようになると、再び隆盛期を迎えることとなった。その理由は、読者を強く意識したさまざまな工夫がされるようになり、新たな展開を見せたからである。怪異譚が興味本位の読み物として認識され、書き手の側もこれまでの伝統的な著作態度に大きな変化が見られるようになった。すなわち、古くより伝えられた怪異譚を土台としつつも、読み物としての娯楽性を高め、単なる怪異譚の伝承ではなく、文学作品としての完成度を高めることを目的として書かれるようになったのである。ここに志怪小説は新たな転換期を迎えたと言えるよう。

小論では、清代を代表する志怪小説として『諧鐸』『聊齋志異』『閱微草堂筆記』『子不語』の中から幾つかの作品を材料に比較検討を行い、これらの書がどのような資料をもとにして形成されたのか、その経緯と作者の著作意図について考察を試みた。その結果、主に六朝志怪の記事をもとにして、さらに作者の手による資料の編集と創作がなされていることが確かめられた。とはいってもその創作については、架空の話を創造する意識はなく、あくまで小説としての面白さを目的としたものであった筈である。そこには古くから伝わる怪異譚を伝承しようとする意識は依然として健在であり、さらにそれに加えて新たな読み物を創造しようとする作者としての意欲が感じられる。

清代志怪小説の白眉ともいえる『聊齋志異』は、その記述に屢々飛躍が見え、文意が分かりにくいことがある。一方、本書の中で、または『子不語』等、小論で考察の対象とした同時期の清代初期に書かれた作品群の中には、これとよく似た怪異譚が見えることがあり、これらの資料には『聊齋志異』の飛躍した箇所を補う記述がある例が屢々見つかる。あらためてそれぞれの書の成書年代を確認し検討した結果、清代志怪小説の作者の手元には、世に広く知られた怪異譚の資料があらかじめ準備されていたらしく、それをもとにして書かれたために、このような問題が発生した可能性を指摘した。この推論が正しければ、清代志怪小説の形成過程を知る上での大きな手がかりとなる筈である。

注

- (1) 盛時彦は紀昀の門人。乾隆五十八年（一七九三年）跋。
- (2) 『閱微草堂筆記 子不語』中国古典文学大系42前野直彬氏解説（志怪の流れ）一九七一年、平凡社刊）を参照。

(3) 『中国小説史料叢書』所収『諧鐸』(一九八五年、人民文学出版社)に喬雨舟の「校点後記」を載せている。中島長文氏の『中国小説史略』訳注によれば、この『諧鐸』は乾隆五十六年刻本の最も早い藤花樹本を底本としている。また、『諧鐸』十卷(乾隆五十六年序)」というのは魯迅の誤りで、本来十二卷であるという。

(4) 『搜神記』には、他にも虎に拉致された話が見える。

陳郡の謝王、瑯邪の内史と為り京城に在り。在る所、虎暴れて人を殺すこと甚だ多し。一人有り、小船を以て年少き婦を載す。大刀を以て船に挿著し、暮れを挟みて来りて邏所に至る。将に出でんとするに、語りて云ふ、此の間頃来、甚だ草穢多し。君細小を載せ、此の輕行を作すは大いに易からずと為す。邏宿に止まる可きなり、と。相ひ問訊すること既に畢はり、邏將適き還り去り、其の婦、岸に上る。便ち虎に將ち去らる。其の夫、刀を抜き、大いに喚き、之を逐はんと欲す。先に蔣侯を奉事す。乃ち喚き助けを求む。此の如くして当に行くこと十里、忽ち一黒衣有り、之が為に導くが如し。其の人、之に随ふ。当に復た二十里にして大樹を見る。既に一穴に至る。虎の子、行声を聞き、其の母至ると謂ひて皆な走り出づ。其の人、其の所に即きて之を殺す。便ち刀を抜き、樹側に隠る。住ること良久しくして虎、方に至る。便ち婦を下ろし地に著き、倒に牽きて穴に入れんとす。其の人、刀を以て腰に当て、之を斫断す。虎、既に死す。其の婦、故活す。曉に向ひ能く語る。之に問へば云ふ、虎、初め取れば便ち負ひて背上に著く。至るに臨んで後、之を下す。四体他無く、止だ草木の傷を為すのみ。

『搜神記』卷五

(5) 東軒主人『述異記』に、康熙二十三年、広東省の獵師の話として、夜中、康王廟で寝ていたところ、人語を話す虎が多数現れ、神前に跪き、神の指示を仰いだという。『中国古典文学大系』④②(注1を参照)に訳出されている。未見。

(6)

『中国古典文学大系』『聊齋志異』(旧版) 藤田佑賢氏の解説(四三三頁) 昭和三十三年、平凡社刊及び、汪玢玲氏『蒲松齡与聊齋志異研究』第九章第一節『資料輯佚工作』第三五〇頁(二〇一五年、中華書局刊)を参照。